

土屋弥生 著

『教師と保護者のための子ども理解の現象学』

八千代出版 2023年 175ページ

「まえがき」によれば、本書の目指すところは「子どもたちの本当の姿を『見る』方法を提案」することであるという。そのように言うと、読者はたちまち「本当の姿」とは何か＝目に映る姿は「本当」ではないのか…と「？」に包まれ、やがてその正体を露わにするための特別な「方法」があるのなら手に入れたい、と念ずるようになるかもしれない。もっとも、「いちばんたいせつなことは目に見えない」と星の王子さまに忠告されるまでもなく、「居心地（が悪い）」「空気（が読めない）」「コミュニケーション（が取れない）」果ては「生きづらい」等々、子どもたちが抱える退っ引きならない問題の多くは、まさに「見えない」がゆえに掴み難い。それでもこの難局にあって、かの王子は「とても簡単なことだ。ものごとはね、心で見なくてはよく見えない」と、私たちの背中を押してくれる。もちろん、王子の言葉どおり、すぐに「なーんだ、簡単ですね」となるわけではなく、「心で見る」という作法に通じていくことが必要である。その重要なツールとなるのが、表題に冠されている「現象学」である。

現象学では、「象る＝かたどる」すなわち実体のないものに形を与えることで浮かび上がってくる「現れ」を手がかりとし、そのような仕方で形を与える（象る）ことになった経緯を探究することを通じて、元々の「実体のないもの」の正体＝本質を明らかにすることが目指される（きわめて雑な説明ではあるが、大きく外れるものではないだろう）。ここで、特に本書で留意されているのは、難解な専門用語を繰り出して学術論文を執筆する学者にではなく、「いま・ここ」の現場で当事者として子どもと直に向き合う教師や保護者にこそ届き、大きな「効き目」をもたらす智慧の数々を開陳することである。そのため、いわゆる机上の空論に終始することなく、リアリティを伴った「自分事」として問題に身を重ねることを誘うべく、多くの事例が紹介されている。ただし、それは個々の事例の対処法をハウツー的に陳列した「具体例（具象）のコレクション」ではない。そうした事例が「意味のある出来事」として象られた経緯、換言すれば「見立て」の論拠が堅固な人間学的現象学の考え方に沿って過不足なく呈示されることによって、個々のケースは抽象度を高めた一般理論に回収されている。

日常を振り返れば気づくように、私たちは日々遭遇する個別具体的な問題情況の逐一に「正答」を持ち合わせているわけではない。現前する、あるいは自らも巻き込まれているそのケースをできるだけ抽象化して「要するにどういうことなのか」を見定め（情況の再定義）、過去に経験した他のケースに準えて対応を講ずるのが常ではないか。ここから推論されるのは、「理解」とはある事態がそうになっていること（＝因）を「憶える」ことではなく、そうってしまった経緯や出所（＝地）が「解る」ということである。そのためには、天空の高みに集積された学問的知見（理論）と下界の町場で起こる出来事（実践）との結びつきを見出すこと、すなわち「抽象と具象の自在な往還」が求められる。本書には「パトス」「エポケー」「超越論的還元」…等々、見慣れない・聞き慣れない言葉が登場するが、重要なのは、それらの用語を憶えることではなく、そうした用語が登場する具体的な場面に（子どもや教師や保護者にとって）どのような世界が広がっているのかを豊かに想像し、身を浸し、「馴染み」の感覚を得ていくことである。



以上のように、本書が示す「子ども理解」に向けた周到な方策によって、読者には教育実践の堅固な足場が築かれるだろう。ただし、教師や保護者は教育実践を対象化して遠巻きに眺める評論家ではなく、まさに「いま・ここ」の子どもたちと直に向き合い、決して状況が見通せているわけではないし、何が正しい／間違っているかもわからないが、ともかく「なんとかする」ということを積み重ねていかねばならない立場にある。長年にわたって高等学校教師として勤務し、且つ学校心理士の立場からも現場に携わってきた著者の見地からすれば、「子ども理解」はあくまでその後続く教育実践の礎であり、教育実践の眼目は「教師が教え切ること」ではなく「子どもの人間的成長」である。そこで、このような意味での教育実践を十全に稼働するための力、すなわち実践的指導力（実践知）について、本書ではことさらに力点が置かれている。わけても特筆すべきは、こうした「力」は教師個人が備える実体的な技量ではない、と注意喚起している点である。子ども理解を礎とする実践は、一人ひとりの子どもと向き合うその都度の文脈状況に応じて適切な間柄を保ちながら進めていくものであり、いわば

「関係づくり」の能力に懸っている。

ふと立ち止まって考えてみると、私たちには子どもに「教える」などということはほとんど叶わないのではないか。もっと控え目に、そして同じ地平に立ち、子どもが気づいたり、発見したり、試してみたり、創り出したり…と自らの足で主体的に歩み出すその背中をスッと押してやるばかりではないか。「関係づくり」なら（少しの工夫で）できるが、「人間づくり」には遠く手が及ばない。人間学的現象学とはそういうことを教えてくれる学問なのかもしれない。「鈴木さん、現象学をやると優しくなれるよ…」という大先輩の言葉をふと思い出した。

参考文献

サン＝テグジュペリ：河野万里子訳（2006）星の王子さま（第28版）．新潮社．

評者

鈴木 理

日本大学文理学部